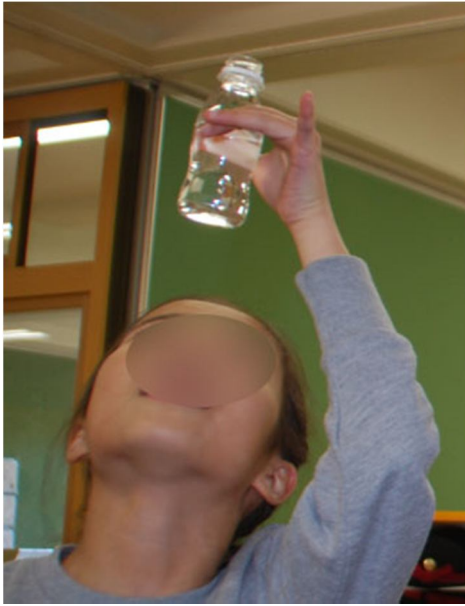


「3年生にプラナリアを配る(4)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

結果的に、3年生の子どもたちのほぼ全員がプラナリアの「飼育者」となった。子どもたちは、この奇っ怪な生き物のどこに魅力を感じるのか不思議だが、実に楽しそうに観察している。



飲むヨーグルト「LG-21」「R-1」の容器は、小さなPETボトルである。容量は100mL余りで、こうした小さな生き物の運搬・飼育には誠に都合が良い。ほかにもダンゴムシ、クリシギゾウムジの幼虫、アリの観察などにも適している。また、容器の壁面が曲線を描いているので、それが凸レンズの役割をして、中の生き物が大きく見えるのも良い。



子どもたちは、「先生、プラナリア、手にのせてみたいなー」と言うので、1匹ずつのせてあげた。プラナリアは、衝撃と体温ですぐに防御態勢に入り、丸くなってしまふ。しかし、水滴と一緒に手のひらに置く

と、少しだけ動き回る様子が観察できる。



プラナリア配布の翌日からは、多くの子どもから、絵だより(絵日記)の提出があった。どれも面白い。「観察したい」「育てたい」という気持ちが嬉しい。

【子どもの絵だよりから】

「今日、先生が1年半ぐらいそだてて、四百っぴきになったプラナリアのうち、三ひきもらいました。家についたとき、LG21のそこのほうで、動かなくなっていました。死んじゃったのかと思って、あせって見たら、すぐに元気に動いてくれたので、安心しました。なまえはプラちゃん……」

「……ブタレバー(豚レバー)をスーパーで売っていなかったんで、ひき肉をあげてみました。ぜんぜん食べなくて、むしして通り過ぎていました。二十分ぐらいして、もう一度見たら、二ひきがひき肉にのっかって食べてました……」

「……私はプラナリアを3ひきもらいました。学校で、おんど計の虫めがね(カード型ルーペ)で見たら、より目が見えて、少しかわいいなと思いました。エルジー二十一(LG21の容器)をハンカチにくるんで、カバンに入れて、つれて帰りました。家についたらびっくり。もう五匹にふえていました。すごいはんしょく力です。はやく、先生みたいに四百っぴきまでふやしたいです。」

「……プラナリアは、入れ物のそこを歩きます。まず首をのぼして、それからしっぽをちぢめ(縮め)ます。それをくりかえして、進んでいるということ、ぼくは発見しました。」